

# ノスタルジーのカルチュラル・スタディーズ —スヴェトラナ・ボイム『ノスタルジーの未来』の描くロシア—

石丸 敦子

## 目次

ソ連解体以後の状況

ロシアに出現したノスタルジー現象

カルチュラル・スタディーズとしての

『ノスタルジーの未来』

ソ連に関するもう一つの著作

「ノスタルジー」という基本概念

本書の構成

ウラジーミル・ナボコフ

ヨシフ・ブロツキー

イリヤ・カバコフ

三人の亡命芸術家たちのノスタルジー

ノスタルジー研究の有効性

ボイムとカルチュラル・スタディーズ

## ソ連解体以後の状況

「私は皆さんに許しを請いたい。それは、われわれが皆さんとともに抱いた多くの夢が実現しなかったからである。…灰色の停滞した全体主義の過去から、明るく豊かで文明的な未来へ一足跳びに移るという希望は実現しなかった。…ことは一気にすべて片づくと思えたが、そうはいかなかった。私はあまりにナイーブであった。そして、問題はあまりに複雑であった。われわれは誤りや失敗を犯してきた。」<sup>1</sup>

これは、経済が一向に回復しないなかで、ロシアのエリツィン大統領が 1999 年に突然引責辞任した際の演説の一節である。この言葉は、本稿が書評を試みるスヴェトラナ・ボイムの『ノスタルジーの未来』<sup>2</sup>が刊行された当時の、ロシアの状況と人々の心情を端的に伝えている。エリツィン辞任の直後にプーチンが大統領代行として立てられたが、今から振り返るとそのことはソ連崩壊に

つぐ二度目の断絶であったとさえ感じられるほどである。強いロシアへの回帰が望まれて、その願望のなかに、漠然としたユートピアに代わって、いままたおぼろげなソ連の姿が投影され始めたからである。

1991 年にはほとんど無血で社会主義国家体制が放棄され、そのまま「民主化」と市場経済システムに移行すると考えられていた。しかし、人びとが各々の未来を素朴に思い描くことができたのはごく短い期間にすぎない。未来の明確なヴィジョンを作ったり必要な経験を蓄積したりする時間もないまま、状況は、次第にアナーキーな様相を呈していった。ノーメンクラトゥーラと呼ばれるソ連政府の中核にいた人々が崩壊したシステムの空隙にすべり込み、国有財産の「民営化」に乗じて横領と着服を図り、それまでの政治的な権力をそのまま経済的な権力へとスライドさせてしまった。それは、実質的にソ連の体質がロシア連邦に持ち越されてしまう一因になった。市場経済のシステムやメカニズムが理解される暇もないまま経済は大混乱をきたしたが、そのさなかにネオ・リベラリズムはショック・ドクトリン戦略(ナオミ・クライン)によってロシア社会侵入してしまった。一時的にロシアは、貧困国のひとつにまで突き落とされてしまう。ソ連解体の恩恵は庶民にはほとんどもたらされず、一握りの富裕層と大多数の貧困層への二極化が進んだ。その状況は現在にいたっても改善されたとは言いがたい<sup>3</sup>。ゴルバチョフとエリツィンの 90 年代が「スムータ смута (動乱の意)」と呼ばれるほどに混迷を深めていった時に、ブレジネフの「停滞 застой」の 70 年代を、む

<sup>1</sup> 木村汎、袴田茂樹、山内聡彦『現代ロシアを見る眼—「プーチンの十年」の衝撃』NHK 出版、2010 年、93 頁。

<sup>2</sup> Svetlana Boym, *The Future of Nostalgia*, Basic Books, 2001.

<sup>3</sup> プーチンの政策により、あるいは 2008 年の経済危機をきっかけに、オリガルヒと呼ばれる新興財閥の中には解体されたり、多くの資産を失ったりしたものもあり、シロビキの台頭や政府に追従する別の資本家の下に資本が流入するなど、富裕層の中においては大きな変動が経験されていた。また、日臺 健雄『現代ロシアにおける中間層の形成』(2014 年)によると、貧困層は減少傾向にあるが、経済や機会の不平等はむしろ増加傾向にあるとも報告されている。

しろ良き時代として懐かしむという現象が起こったのである。

### ロシアに出現したノスタルジー現象

生活必需品のために長い行列に並ぶことは、慢性的な物資不足に苦しんだソ連時代の象徴的な光景であった。しかし、その時期には失業は存在せず<sup>4</sup>、また質に難点があったとはいえ、セーフティネット<sup>5</sup>が完備されていたから、貧困のせいで生命の危機にさらされるということはなかった。健康で学力優秀で品行方正な子どもは、共産党の下部組織であるピオネールに早くから入団を許され、革命記念日に人々の前で報奨される。そうした晴れがましい経験も人びとの記憶に残っていた<sup>6</sup>。しかし、いまやこれらの恩恵は雲散してしまい、米ソ両大国の一方の雄であったという誇りは失われ、ロシア国家は外貨不足のためにデフォルト宣言を余儀なくされるところまで追いつめられた。このような状況下で、旧社会主義時代に対するノスタルジー現象が起こったのである。

もともと、ソ連邦崩壊から四半世紀近くを経た今は、世界最大量と言われる天然資源の戦略的輸出によって、国家経済は一応の安定を見ているが、ノスタルジー現象は変わらずに続いている。文化的な空虚が依然として存在したままだからである。しかも、ノスタルジーの対象は、かつての福利厚生上のシステムに対して抱かれているだけではない。興味深いことに、それは、ソ連型社会主義下で生まれた庶民レベルでの実利的、精神的な横のつながり自体を対象にしているのである。ソ連の社会主義は、資本制的生産様式とは対極的な経済体制を目標にしていた。レーニンの『国家と革命』

の説明では最終的に国家は死滅するはずであったが、とりあえずは強力なプロレタリア独裁の国家が指令型計画経済を運営していた。現実には、広大な国家の隅々にまで及ぶ計画経済体制を考案・実施することは成功していなかった。計画経済の非合理的秩序の下では、人びとは日々の生活のために、コネを最大の武器としてそれぞれが必要なもの調達をはかるシステムを形成せざるをえなかった。これが「第二経済」あるいは「闇の経済」である。この暗黙のシステムは、むしろ計画経済を実質的に下支えし、その基盤となった。たとえば、直近の上司を含む、職場、血縁、友人、近所付き合いのグループで、品物を融通し合い、情報を交換し、困った時には有形無形で助け合うのである。この第二経済下での横のつながりは、極端な体制のもとでしか現れえない仮想のヒューマニティであったといってもいい。もちろん、その内実は、横流し、水増し請求、隠蔽工作といった、イリーガルな性格をもった行為であることも少なくなかった。ただし、少なくとも庶民レベルではこうした第二経済のなかに賄賂が介入することはほとんど確認できなかった<sup>7</sup>という。ところが、このような強固な横のつながりは、新生ロシアになって跡形もなく消滅してしまう。あとに残ったのは、国家の収奪に対して、こちらも密かな略奪で応酬するしかないという意識と習慣だけである。そのうえで人びとは、ソ連邦のもとの第二経済が持っていた横のつながりに対して、ことさらに強いノスタルジーを抱いたのである。

現在では、さすがに全体として社会主義のソ連時代にそのまま戻りたいという声が多数派を占めることはない。それでも、ソーマフらの研究<sup>8</sup>によれば、30歳代後半よりも年長のソ連時代の記憶がある世代では、さまざまな形でこの時期に対するノスタルジーの兆候を示していることがわかる。その時代を直接経験したことがない若い世代も、

<sup>4</sup> W.ブルス/K.ラスキ『マルクスから市場へ—経済システムを模索する社会主義』岩波書店、1995年。ブルスとラスキによると、ノルマを余裕を持って達成するために企業は労働力を必要以上に確保し、国家もそれを黙認するという「ソフトな予算制約」のため、労働力はつねに不足し売り手市場であり、失業はほとんど存在しなかった。

<sup>5</sup> 学費、医療費、年金などはすべて無料で、ほとんどの女性の社会進出に伴い（政治局には女性の幹部はほとんどいなかったが）、職場には、託児所、保育所、食堂の設備があった。上昇志向を持つ者には学ぶためのルートも開かれていた。

<sup>6</sup> ピオネールは、ソ連・東欧圏の少年団。入団には、本人の資質のほかに出身階級がプロレタリアートであることも重大な要件とされる時期もあった。

<sup>7</sup> この点については Eugenia Belova “Economic Crime and Punishment”, Paul R. Gregory, ed., *Behind the Façade of Stalin's Command Economy*, (Hoover Institution Press, 2001)、及び Sheila Fitzpatrick, “9 Blat in Stalin's Time”, Stephan Lovell, Alena V. Ledeneva and Andrei Rogachevskii, eds., *Bribery and Blat in Russia* (Macmillan, 2000)を参照した。

<sup>8</sup> Владимир Сомов, “Социальная История : Феномен «Советского»”, Г.А.Бордюгова, *Между канунами Исторические исследования в России за последние 25 лет*, (Москва, 2013).

親密な家族や知人から聞く過去の物語を内面化することによって、同様のノスタルジーをコピーしている。市場経済システムに転換しても、民主化や全体が豊かになるという希望は棚上げされたままであり、人びとは、国の中にいながら亡命者のように眼前にはない現実を渴望するというアイロニカルな状況になっている。

## カルチュラル・スタディーズとしての

### 『ノスタルジーの未来』

さて、本稿が論じる Svetlana Boym, *The Future of Nostalgia*, Basic Books, 2001 は、ノスタルジーそのものを理論的に扱うことに成功した数少ない書物である。著者スヴェトラナ・ユーリエヴナ・ボイムは、ハーバード大学のスラブ文学と比較文学の教授であり、しかもデザイン・建築大学院の準教授でもある。また、メディア・アーティスト、劇作家、小説家でもあって、展示会への出展から個展の開催まで、積極的に活動している。彼女は、1966 年にレニングラードでユダヤ系ロシア人として生まれた。ゲルツェン教育学研究所でスペイン語を学ぶが、ティーンエイジャーの時、両親とともに出国し、フランスの難民キャンプを経てアメリカに移住した。ボストン大学で修士号を、ハーバード大学では博士号を取得している。近年は、ユートピアとキッチンや記憶とモダニティの間の関係について取り組んでいるという。この経歴からみて、ボイムは自らの経験とともに、ロシアのユダヤ人としても、全体主義の粛清、抑圧、収容所、亡命といった集合的に受け継がれてきた記憶に深いかかわりを持っていると言っている。

本書は、全体が、理論と実践をつなごうとするカルチュラル・スタディーズの実践にもなっている。そして、そのノスタルジーに関する考察は、アレゴリー<sup>9</sup>として、近代の概念についてのラディカルな批判にもなっている。本稿では、ボイムのノスタルジー読解を書評することを通して、過去はいかに多面的な姿で見出し得るものであるのか、

<sup>9</sup> ボイムが深く依拠するベンヤミンが、『アレゴリーとバロック悲劇』で論じた、象徴と対比されるものとしてのアレゴリーを指している。アレゴリーは思弁的な存在であり、そこでは個的人間存在の中に歴史性が立ち現れる。またアレゴリーには独断的な解釈に一義的に決定されず、むしろ各人が各様の解釈ができる余地がある。

そのなかの特定の過去像が、未来を射程に入れて現在を変革しようとする企てにどのように貢献するのか、という点を検討したい。

## ソ連に関するもう一つの著作

本稿が取り上げるボイムの作品とならんで、同じく現代ロシアを知るために独自のアプローチでソ連時代を解説しようとした特異な著作に、スーザン・バック＝モースの『夢の世界とカタストロフィー』<sup>10</sup>がある。ボイムの著作と同じところに発刊され、内容もともに「近代の概念」に挑戦しようとするものである。レーニン、トロツキー、スターリンによって建設された時期のソヴィエト社会主義が、その生産力概念においては、資本主義と同然の了解に、つまり《近代》に無自覚に呪縛されていたことを明らかにした仕事である。バック＝モースは、特に20世紀初めから20年代にかけて主流になっていたロシア・アバンギャルドを取り込んで利用した権力のディスクールを鮮やかに読み解いていく。そのようなバック＝モースの仕事と対照させてみると、『ノスタルジーの未来』は、ペレストロイカから、経済体制の移行に失敗して苦境におちいるまでの十数年間の、つまりより新しい時期のロシアを扱っている。また、こちらは、ポップ・カルチャー、サブ・カルチャーに焦点を当て、ノスタルジーという装置を使って、民衆の意識と心情を掘り起こそうとした。これら二つの著作は、取り扱った時代と焦点を当てた人びとの属性という点において相互補完的であるが、共通点もある。

まず、両作品の第一の共通点は、どちらもベンヤミンの『パッサージュ論』<sup>11</sup>を強く意識していることである。ベンヤミンは、勝者が描く歴史から排除されたものからなる瓦礫の山、廃墟の中か

<sup>10</sup> Susan Buck-Morss, *Dreamworld and Catastrophe / The Passing of Mass Utopia in East and West* (The MIT Press, Cambridge, Massachusetts, London, England, 2000). (=堀江則雄訳『夢の世界とカタストロフィー』岩波書店、2008年。) 評者は、この著作でも書評を行った経緯がある。(石丸敦子「文化的できごととしてのソ連解体—スーザン・バック＝モース『夢の世界とカタストロフィー』を読む—」『クアドランテ』第16号(東京外国語大学 海外事情研究所、2014年3月) 275-282頁。

<sup>11</sup> ヴァルター・ベンヤミン『パッサージュ論 第1～5巻』現代岩波文庫、2003年。

ら断片を寄せ集め、それらを組み立てる<sup>12</sup>。そうすることで、過去のありえたかもしれない可能な生を救出するのである。そのような断片はまだ生命を失っておらず、現在の中に取り戻され蘇る<sup>13</sup>。その中には「全体主義の原罪を免れた社会主義の可能性の探求」<sup>14</sup>も含まれるだろう。文学、映画、事件、広告、放送、新聞、雑誌、知識人、大衆、流行、建築、都市、旅行、家族といったあらゆる人間にかかわる文化事象<sup>15</sup>の打ち捨てられた断片が、著者の学識や感性に従ったある配置のなかに布置されるとき、読者はそこからかつての夢の形を再構築することができる。

両作品の二つ目の共通点は、ともに現在の逼塞した状況に対する危機感から出発しているという点である。社会主義国家建設の試みは失敗し、新自由主義とそれが鼓舞するグローバリゼーションが拡大の一途をたどっている。経済効率が物事と人間の活動を決定する唯一の基準となった。それに抗する二人の理論家の意志は、次のようなノーマ・フィールドの言葉で代弁することができる。

私たちはこれまでと違う世界を築けるという夢を、大人の現実主義の名のもとに捨ててしまうわけにはいかない。そのような現実主義は破壊と死のもとになるだけなのだから。…成就することも断念することもかなわぬルネッサンスをめざしてひたむきに進むことである。<sup>16</sup>

<sup>12</sup> 『歴史哲学テーゼ』の中では、星座の構成と表現される。

<sup>13</sup> ベンヤミンのこの救済の概念は、今村仁司著『ベンヤミン「歴史哲学テーゼ」精読』（岩波書店、2000年）を参照した。

<sup>14</sup> ハンナ・アーレント『全体主義の起源 3 全体主義』みすず書房、1968年、訳者あとがき 324頁。

<sup>15</sup> ボイムは、「世界中に輸出されたグローバリズムの最も一般的な通貨は、お金と大衆文化である。ノスタルジーもグローバル文化の一樣態であるが、それは違う通貨を要求する。……ノスタルジーのかけらを発掘するには、記憶と場所という二つの考古学的アプローチ、そして幻影の歴史と現実になされたことの歴史という二つの観点が必要になってくる」(xvii-xviii)としている。

<sup>16</sup> ノーマ・フィールド『天皇の逝く国で』みすず書房、1994年、335頁。

## 「ノスタルジー」という基本概念

The Future of Nostalgiaの序章において、ボイムはノスタルジーの概念を、二つのカテゴリーに区別し、それぞれに特徴的な名を与えている。そもそもノスタルジーnostalgiaは、「家へ帰る」という意味のnostosと「憧れ」を意味するalgiaからなる、近世に始まる造語であった。algiaには、「光と生への回帰」という意味も含まれている。一般的にノスタルジーは、もはや存在しない故郷、あるいは一度として存在したことのなかった故郷に対する憧れを表わしている。つまり、喪失、とくに場所喪失の感情であり、その人だけの幻影を伴うナラティヴのことである。それが掻き立てる故郷への愛の感情は、遠く離れているときにだけ存在し続けることができる<sup>17</sup>。

ボイムは、そのノスタルジーのメカニズムの中に、二つの異なった、対抗しさえする様態を見出し、それぞれを「復旧的ノスタルジーrestorative nostalgia」と「反省的ノスタルジーreflective nostalgia」と名づけた。それはいわば、二つの顔を持つというヤヌスなのである。

一方で復旧的ノスタルジーでは、nostosが強調され、失われた故郷の歴史を超えた再構築が試みられる。そのとき、ひとは自分がノスタルジーに囚われているとは考えず、むしろそれこそが真実であり伝統であると考え、絶対的な歴史を擁護する傾向がある<sup>18</sup>。それに囚われた人びとは、取り戻せない時間を手に入れられるかのように考え、「想像の共同体」<sup>19</sup>である故国への帰属意識を記念碑のようなものに物質化しようとする。

他方、反省的ノスタルジーでは、algia、つまりあこがれの反事実的な契機が重要であり、アイロニカルな特性が強く、しかも絶望的に帰郷を遅らせるようとする傾向すらある。それは憧れと帰属意識の矛盾する感情の中に住んでおり、絶対的な真実であり自明なものとされてきたものを疑惑の中に招き入れる。あるいは、一度に多くの場所に住み着き、異なる時間領域を想像することができるのも、こちらのノスタルジーの方である。それは、ディテールを愛する傾向があるが、象徴的な

<sup>17</sup> Boym, xviii.

<sup>18</sup> Ibid.

<sup>19</sup> ベネディクト・アンダーソン『想像の共同体 ナショナリズムの起源と流行』書籍工房早山、1983年。

作用は好まないということも重要な特徴としている<sup>20</sup>。そして、復旧的ノスタルジーが作り出したものを解体してしまうような、再帰的で積極的な契機すら含んでいる。このような二つのノスタルジーの概念的区別が、ボイムの議論の核心を構成している。

## 本書の構成

ボイムの作品は、第一部では、15世紀における「故郷を思う病」という観念から、近代における「時代のもたらす病気」へとその意味を変容させていくノスタルジー現象そのものの歴史を辿っている。そして、第二部以降では、具体的にノスタルジーの事例分析が、ロシアの都市表象をめぐって実践され、モスクワ、サンクト・ペテルブルク、ベルリンをめぐって構築された集合的記憶が鮮やかに腑わけされている。これらの叙述には、書評者としてまったく間然するところがない。

そこで本書評では、第三部の評価に重点をおき、亡命芸術家のテキストや作品を素材としたボイムの分析について限定して論じることにした。ボイムは、ケース・スタディとして、ウラジーミル・ナボコフ、ヨシフ・ブロツキー、イリヤ・カバコフを取り上げている。かれらは、「移民とは死のようなもので、知ることのできる地平を超えたどこかへ出発すること」<sup>21</sup>とされていた時代に亡命を余儀なくされ、また帰郷が可能になってからも二度とロシアへ戻ろうとはしなかった人びとである。ソ連邦の第二経済下では、かりそめの連帯という仮象の下で、多くの人びとが横並びで同じような生活を営んでいたが、そのことが自らの疎外状況を直視することを阻んでもいた。それに対して、三人の亡命作家たちは、流浪によって国の外に観測点を与えられ、それが彼らに新たな思考の地平を獲得させたと言える。かつての連帯下のつながりをなつかしむ所作は、さきの整理では、「復旧的ノスタルジー」に特徴的なものであった。しかし、亡命作家たちは、大衆の中でアトム化されることを拒み、個として、疎外や離反という全体主義の暴力を自らの作品の中で検証し続けた。かれらのノスタルジーは、つねに「反省的ノスタルジー」

であらざるをえない。「反省的ノスタルジー」の批判的な潜勢力を立ち入って省察するために、以下ではボイムの議論に即しながら、亡命作家たちが一体何にノスタルジーを抱き続けたのか、何が彼らの帰郷を阻んだのかをある程度詳細に確認していくことにしたい。ウラジーミル・ナボコフ、ヨシフ・ブロツキー、イリヤ・カバコフの順に見てみる<sup>22</sup>。

## ウラジーミル・ナボコフ

作家ナボコフは、帝政ロシアのペテルブルクで貴族の長男として生まれ、ケレンスキー暫定政権の大臣であった父とともに、十月革命勃発後に欧州に亡命した。父は、二年目に亡命先で暗殺されている。夫人がユダヤ人であったために1940年に渡米し、コーネル大学等でロシア文学、ヨーロッパ文学を教える傍ら<sup>23</sup>、英語で創作するようになった。

人生の四分の三を亡命者として過ごしたナボコフにとって、「ノスタルジーは、彼の仕事の原動力であり続けた」<sup>24</sup>とボイムは指摘する。亡命後の初期の活動は詩作であったが、そこでは、「庭の小道に落ちた陽だまりのまだら模様、道に沿った生垣の綿毛のふわふわしたライラックに止まる蛾、そして新雪の上に雀がつけた楔形の足跡」<sup>25</sup>といったような、いわば五感に訴えるような肉体的疼きとしてのノスタルジーを謳いあげるものであった。このロマン主義的な詩作は、「ロシアへ戻るといったたった一つの夢に支配されていた」<sup>26</sup>ののだが、実際にはナボコフはもはや帰郷が絶対的に不可能であるという認識も内面化していた、とボイムは見ている。現に、その後、政治上の危険がなくなった後も、ナボコフは戻ろうとはしなかった。帰還しないということが彼にとって「主要な文学の

<sup>22</sup> 三人の芸術家たち自身の著作中からボイムが引用したものを、本稿でさらに引用した場合は孫引きとなるが、出典としてボイムの著作中での頁を記入することとする。

<sup>23</sup> 彼の第二の専門は昆虫(鱗翅目)学であった。かれは、屋敷のあったペテルスブルク郊外の大自然の中で、昆虫学への興味と素養が培われたが、それは彼の詩の世界そのものでもあった。彼のこの分野についての造詣は、大学で教鞭を取るほど専門性の高いものであった。

<sup>24</sup> Boym, p.262.

<sup>25</sup> Ibid., p.262.

<sup>26</sup> Ibid., p.268.

<sup>20</sup> Boym, xviii.

<sup>21</sup> Ibid., p.331.

装置」<sup>27</sup>となっていたからである。ところが、同時にこの作家は、自分のテキストの中ではほとんどいつも帰還を果たしているのである。現実には帰郷してしまうことは、「復旧的ノスタルジー」に引きずられて虚構の故国を構築することに他ならない。したがって、帰郷がかなったとたん、亡命の時間は、単なる思い出としての新たなノスタルジーの中に閉じ込められかねない。「再訪することではなく、想起することから痛手を受け」<sup>28</sup>続けることが、亡命による喪失や離反の痛みを考えるだけでなく、生や世界といったものそのものを反復して再考し続けるための手掛かりとなるのである。ボイムの表現によれば、それは「取り返しのつかない損失である亡命生活を自分のライフワークに転じるという、生存をかけた狡猾な方策」<sup>29</sup>でもあったのだ。

ナボコフ亡命のキータムとして、ボイムは彼の散文の中で何度も出てくる「パスポートの無いスパイ」に着目している。物語は「彼に虚構の人物を通して旅を実行させ」<sup>30</sup>、「子ども時代のロシアに戻り、幸福と承認の瞬間を体験」<sup>31</sup>させるだけでなく、ありえたかもしれない過去の可能性を幾通りも紡ぎ出させるのである。探偵小説という形式は、「作家が自身では越えたことのない国境を越えようとする秘密のミッションに、代役を送り込むことを可能にした」<sup>32</sup>。ボイムは、作中で帰郷することを、美学的な意味での模倣<sup>33</sup>であると解釈している。「ダーウィンの進化論からフロイトの精神分析まで、決定論的な近代イデオロギーとの絶え間ないドン・キホーテ式の闘争の中で、ナボコフは自身の模倣の概念を進化させていく」<sup>34</sup>。それは、ナボコフ的な「精神の永劫回帰」であり、文学を通して近代的な概念に対抗することでもあった。ナボコフ自身の政治観は、次の引用にあるように、どこまでもリベラルなものであった。

それは古臭さという点では古典的なリベラリ

ズムという信条である……言論の自由、思想の自由、芸術の自由……政府のトップの肖像画は切手のサイズを超えてはならない。拷問も処刑もなしである。<sup>35</sup>

「人間に対する暴力や残酷な行為は、どんな政治的、ユートピア的目的によってでも正当化されることはできないという考え」<sup>36</sup>がナボコフの反ソヴィエト主義の核心にあった<sup>37</sup>。そのために「しかたのなかった亡命が自発的なものになる」<sup>38</sup>のである。彼にとってのソ連邦は、「私が覚えているロシアではなくて、私にとっては許しがたい今日の本当のロシアであって、望みのないままにスラブ的で、望みのないままに私の生まれ故郷そのままであった」<sup>39</sup>。スラブ的という言葉が内包するイメージには、雪に閉ざされた極寒の地が生み出す忍耐力、それにもかかわらず「北のラテン」と呼ばれる陽気さ、総じて運命論者的なところ、帝政時代に大勢を占めた農奴たちの狡猾さ、したたかさ、そして敬虔な正教徒としての伝統が包みこまれている。しかし、ドストエフスキーが「ロシア人は絶対的な君主主義のもとにあるからこそ、無限に自由でもある」として表現した、強大なものに盲目的に無批判に追従してしまうロシア人のメンタリティもここに現れている。これに関して、亀山郁夫は次のように述べている。

ユーラシアという広大な国土に生きる中で、無限の自由が無限のカオスと陥らないために、逆説的に強大な権力が必要になる。……強権とのつきあい方のなかから過去二百年のロシアの文化が誕生した。……それは苦しみをも生む権力であり、ドストエフスキーの苦悩もそこから生まれたものです。<sup>40</sup>

<sup>35</sup> *Ibid.*

<sup>36</sup> *Ibid.*, p.267.

<sup>37</sup> この反ソヴィエトという姿勢が、『断頭台への招待』や『ベンドシニスター』のような初期の小説に全体主義のユートピアを描かせ、また第二次世界大戦の間は、その時期に現れたスターリン主義のソ連を集合的に受容する傾向にも屈服させなかった。 *Ibid.*, p.267.

<sup>38</sup> *Ibid.*, p.281.

<sup>39</sup> *Ibid.*, p.271.

<sup>40</sup> 亀山郁夫「ロシアはどこへ向かうか」『現代思想』2014年7月号、30-31頁。

<sup>27</sup> *Ibid.*, p.262.

<sup>28</sup> *Ibid.*, p.265.

<sup>29</sup> *Ibid.*, p.262.

<sup>30</sup> *Ibid.*, p.269.

<sup>31</sup> *Ibid.*, p.266.

<sup>32</sup> *Ibid.*, p.269.

<sup>33</sup> ベンヤミンの『複製技術時代の芸術作品』で展開されたミメーシスの概念による。

<sup>34</sup> Boym, p.265.

亀山はこのように強権のロシア人にとっての宿命性を主張しているが、このスラブ性は今日に至るまで継続していると思われる。人びとは判断することを権力に預けてしまい、それによって思考の場は空虚になったように見えるからである<sup>41</sup>。ナボコフは『ロリータ』で作家として成功した後は、スイスで執筆活動に専念するようになり、帰郷を拒否したままブレジネフ期の1977年にモントルーで亡くなっている。

### ヨシフ・ブロツキー

革命前に生まれたナボコフとは違って、ブロツキーは、スターリンの全体主義が荒れ狂った時代に、レニングラードのユダヤ人家庭にうまれている。「有益な仕事に就こうとしない徒食者」として逮捕され、1972年には強制退去を命じられ、アメリカに亡命した。彼の場合、ノスタルジーの最初の手がかりはエッセイ集『レス・ザン・ワン』である。その作品では子ども時代の疎外の経験が想起されている。七歳のブロツキーは、図書館の会員登録フォームの民族欄にどうしてもユダヤ人と記入できなかった。そこで、「ぼくは何人か知らないの」と係りの女性に言ってしまう<sup>42</sup>。しかし、「この嘘の経験をさかいとして、アイデンティティを新発見し、意識の真実を探索することになる<sup>43</sup>」と述懐している。

この想起不全の経験が救い出したのは、ボイムによれば、「戦後のソ連で政府が後押しした反ユダヤ主義と、自分の出自からブロツキーが個別的に体験した自己のトリミングという一般的な感覚である」<sup>44</sup>。大祖国戦争期だけでなく、戦後の苦難の時代にも、ソ連では反ユダヤ主義の風が吹き荒れていた。スターリン指導部は、国民を戦争に動

員し、また荒廃と貧困から目をそらすために、ユダヤ人をスケープゴートとする操作を行っていた。もっとも党指導部は、そのために「ソ連の民衆の中に深く根をおろした反ユダヤ主義的な情念」を触発するだけでよかったのである。ブロツキーが別の帝国<sup>45</sup>に移った後も、彼のユダヤ性に対して、公的にも私的にも誹謗中傷が繰り返された。彼には、ノーベル賞のもたらす称賛が無効になるほどの言葉の暴力が、死の前年まで送りつけられたのである。

彼の中期の詩集『一部屋半』<sup>46</sup>は、「もはや追憶の中にしかない詩人と両親の、あのお決まりの退屈な日課へのノスタルジー」<sup>47</sup>であった。詩人が回想するのは、「共同アパートの一部屋半の中で、どんなふうにも母親とふざけあったか」<sup>48</sup>ということであり、あるいはロシアのユダヤ人として可能性に満ちた生を生きることを断念した男としてのかれの父親の姿であった。彼の父は、権力の抑圧を淡々と受け入れる代わりに、内面世界ではとらわれることのない精神と権力者の欺瞞性と無価値さを見透かす眼差しを持ち続けた。ブロツキーは「遺伝子の上にさらに両親から受け継いだものは、ストア派的な禁欲と内面の自由」<sup>49</sup>であったと言う。このブロツキーがスターリン主義の政府をいらだたせたのは、「国民国家という枠組みにまったくとらわれない、社会主義プロパガンダが功を奏していない精神がその詩に照らし出されて」<sup>50</sup>いたからである。

レニングラードは、両親の世界を包摂していただけでなく、詩人の母体ともなった都市である。エッセイ『改名された街の案内』には、このピョートル大帝の人工的で幻想的な都市を自分の足で徹底的に歩いて、その比類のない美しさを肉体的な感覚でとらえたことが記されている。海に向かい、西洋文化に対する開かれた自由な感性を持つ

<sup>41</sup> ロシアにおける民主主義の後退という、強権に関連する議論について、鈴木義一は「現代ロシアの社会意識と市民社会」(立石博高・篠原琢編『国民国家と市民』山川出版社、2009年)で、「プーチン政権の政治姿勢が国民の強い支持を受けていることが見逃され、反対意見を強権的に抑圧することで政権が維持されているかのように描かれていることもある」として、西側からの一面的な見方を批判的に分析している。

<sup>42</sup> ユダヤ人であることを恥じていたわけではないが、日常的には使われないユダヤ人を意味するロシア語「エブレイ」の語感そのものが恥ずかしく、友達に見られたくないと思っただけだったと、ブロツキーは述懐している。

<sup>43</sup> *Ibid.*, p.292.

<sup>44</sup> *Ibid.*

<sup>45</sup> 冷戦時代のソ連帝国と相並ぶアメリカ帝国主義のことを指している。ブロツキーは最終的には米国籍を取得した。

<sup>46</sup> ソヴィエトの都市の住宅は、集合住宅が一般的で、台所、トイレ、風呂は共同であることが多い。三人家族に割り当てられたアパートは一部屋だけで、ブロツキーは本棚で部屋を仕切り自分の書斎を割り出した。

<sup>47</sup> Boym, p.295.

<sup>48</sup> *Ibid.*

<sup>49</sup> *Ibid.*

<sup>50</sup> *Ibid.*, p.296.

この都市の、プーシキン、アフマートヴァ、マンデリシタームに連なる詩的伝統なしには、プロツキーの詩はありえなかった<sup>51</sup>。都市は、死すべき人間に、自分が死んだ後でも残っているという不思議な安心感を与える。物でしかなかったものが、人間のたえざる営みをひきうけ、「個人を超えた集団の経験の産物」<sup>52</sup>になっていくのである。プロツキーのノスタルジーは、そのレニングラードに住み続け、文学で生計を立てている友人たちにも向けられている。

彼らは、最もよく文学や歴史を知り、誰よりもうまくロシア語で書くことができた。……ジオットーやマンデリシタームが自分の個人的な運命よりももっと重要なのである。みすばらしい身なりをしているが、どこかエレガントな彼らは、いまだ存在しない（あるいは彼らの禿げかかった頭の中にのみ存在している）文明と呼ばれるものに、愛を抱き続けたのである。世界から切り離され、望みもなく周縁にあり、物質的にはまるで恵まれないなかで……。 <sup>53</sup>

これこそが「狭苦しい共同キッチンでノスタルジックに虚構の文明をあがめていたレニングラードの1960年代の精神的亡命者の姿」<sup>54</sup>である。

1987年のノーベル賞受賞講演の中で、プロツキーはアドルノの「アウシュヴィッツ以後、詩を書くことは野蛮である」を引用していた。この言葉は、本来は、文明の核心が崩壊する経験のあとに何事もなかったかのように詩を書きつづける文化主義者の保守的な姿勢を告発したアフォリズムであったが、プロツキーは、その先にあることを問題にした。ホロコーストがそうであったように、スターリン主義のもとですべての文化が断ち切られてもおかしくなかったのだが、その時代でも、プロツキーの世代は、詩作の能力を保ち続け、文化を継続させてきたと指摘しているのである。「こ

れはかなりの程度まで私の世代の功績であり、私はこの世代に属していることを、今日ここに立っていることにおとらず、誇りに思います」<sup>55</sup>と述べている。けっして屈することのない知的精神は、イソップの言葉<sup>56</sup>を用いて体制批判を続け、それが後に、ペレストロイカや解体の推進力になった。しかし、圧政者であったソ連邦が解体して以後、「拝金主義の跋扈する中」<sup>57</sup>では、逆説的にも、かえってすぐれた思想を結晶させる空間を確保できなくなってしまった。

### イリヤ・カバコフ

ケース・スタディの最後は、イリヤ・カバコフの事例である。かれの亡命は、先のふたりよりもさらにあとになり、具体的な全体主義の抑圧がなくなった後の1992年に、自発的な亡命者として米国に移住した。この画家は、1933年にウクライナに生まれたが、第二次大戦の戦火を逃れ、ソ連の中をコーカサスから中央アジアまで放浪した経験を持っていた。ボイムは、カバコフの代表的な作品である「失われたアルターエゴとしての」<sup>58</sup>挑発的なインスタレーションに注目している。

カバコフは、かつてソヴィエトの田舎のバス停や駅で見かけられたようなトイレの精巧なレプリカを作品として作った。当時のトイレは、たいてい共同で、しきりとしてのドアがなかったから、ブラックホールの上に腰かけた鷹とでもいうべき姿の他人の自然の欲求を見ることになっていた。このインスタレーションの中では、どういうわけかブラックホールと隣り合わせで人が住まっていて、テーブルクロスのかかったテーブル、ガラス戸のついたキャビネット、本棚、クッション付きのソファ、そしてよくあるフランドル派の絵画のレプリカで飾られた居心地のいい居間になっていた。と同時に、そこには誰かが捕われたこと、その逮捕の瞬間の痕跡が描きこまれていた。そのインスタレーションのなかでは皿は洗われておらず、上着は椅子にかけられたままであった。子供のお

<sup>51</sup> 沼野充義『モスクワ―ペテルブルグ縦横記』岩波書店、1995年、30頁。

<sup>52</sup> スラヴェンカ・ドラクリッチ『パルカン・エクスプレス』三省堂、1993年、219頁。

<sup>53</sup> *Ibid.*, p.294.

<sup>54</sup> *Ibid.*

<sup>55</sup> ヨシフ・プロツキー『私人』群像社、1996年、29頁。

<sup>56</sup> 表面的には体制に従順のように見せかけ、反体制的な言説を行間に滑り込ませたり、互いに半分しか語らないで理解したりする方法を採った。

<sup>57</sup> 塩川伸明『現存した社会主義』勁草書房、1999年。

<sup>58</sup> Boym, p.10.



もちやがトイレのブラックホールのふちにおいてある<sup>59</sup>。つい今しがた、そこから誰かが連行されていったばかりであるかのように。

このソヴィエトのスキャンダラスなトイレは、祖国を西側に売る行為だと批判され、また古風なトイレという遅れたものを展示して民族の恥を晒した裏切り行為だとされた。しかし、実はこれは、実際にカバコフと母親が住んでいた住空間、つまり家として住んだ共同トイレを、自身で丹念に再現したものだったのである。それはかれの記憶なのだ。

子供時代の記憶は、私がモスクワの芸術関係の寄宿学校に入学を許可されて、母が仕事を辞めて私のそばに住み、学生の私と生活を共にしようとした時にさかのぼる<sup>60</sup>。……彼女は、学校お抱えの洗濯婦になったが、アパートがなくて（そのためには特別の居住許可証が必要だった）彼女が得た唯一の場所は、洗濯物（テーブルクロス、掛け布、枕カバー）を畳むところであり、古いトイレの中にあった。母は、家を失ったと感じたが、権力に対峙しても無力だと思っていた。……母と私は決して自分たちの角<sup>61</sup>を持つことができなかったという事実が、子どもの私の心にトラウマとなった。<sup>62</sup>

来館者は、このよく見知った環境に踏み込んで、触れてみて、体感するように誘われる。カバコフ自身は、このインスタレーションの中では、芸術家として、学芸員として、作家として、式典のリーダーとして、そしてさらに来訪者の一人として振る舞う<sup>63</sup>。彼は、説明を加えようとはせず、「彼のトイレを解釈論争の十字路に置き去りにする」<sup>64</sup>のである。このトイレ・プロジェクトから、マルセル・デュシャンの『泉』を想起するひともい

るかもしれない。それは、「大量生産の日常の道具と芸術それ自体の概念の、両方の異化作用」<sup>65</sup>であった。しかし、デュシャンのトイレは、カバコフのそれと比較すると「西洋的、個人主義的な特質を持っていて清潔」<sup>66</sup>なものであった。それに対して、ボイムは、カバコフの自伝的な作品を「芸術性には負っておらず、ぎこちない物質性、流行おくれ、たんに消えゆくソヴィエト文明のかけらとなるという感覚があるだけだが、そのために来世的な物となり、オーラを持っている」<sup>67</sup>と読み解いている。

カバコフのエキセントリックなインスタレーションの中では、物語の過剰性と、特定のイズムには回収されない解釈不可能性のために、人は混乱し思考停止におちいる。もっとも住居に適さない空間に住むという作品であるのだが、それでもこのようなトイレに再び住もうと企てることによってのみ、芸術家の喪失や疎外の底知れなさを直視することができる<sup>68</sup>、とボイムは言う。パニックと困惑の切実さは、そこでユーモアを通して取り戻されるのである。芸術家は、「この住まわれたトイレを、想起せずにはいられない記憶の劇場に変換する」<sup>69</sup>。しかし、「芸術家は完全な過去の家を作ることとはできず、記憶の考古学に橋わたしのできないギャップを残すのである」<sup>70</sup>。記憶論という観点で言うならば、このトイレ・プロジェクトは、「人が決して飼いならしたりすることのできないものとして記憶を語ることで、〈出来事〉を表象不可能な余剰や暗黒の深淵もろとも分有する可能性を追求する」<sup>71</sup>試みであった。

### 三人の亡命芸術家たちのノスタルジー

さて、ボイムの視点を共有しつつ、三人の芸術家たちのノスタルジーの動態を整理しなおすことで、何が見えてきたのだろうか。彼らはみな、自らの作品のなかで、身体的に加えられた死や粛清の暴力という全体主義の経験を直接表現するような

<sup>59</sup> *Ibid.*

<sup>60</sup> それまで、母と子はドニエプロペトロフスクに住んでいた。

<sup>61</sup> ロシアの家庭では、部屋の二枚の壁が合わさる角の天井間近にロシア正教のイコンを飾る習わしがあり、その角は「聖なる角」と呼ばれる。この場合は、「聖なる角」は家そのもののことをさす。

<sup>62</sup> Boym, p.316.

<sup>63</sup> *Ibid.*, p.313.

<sup>64</sup> *Ibid.*, p.315.

<sup>65</sup> *Ibid.*, p.317.

<sup>66</sup> *Ibid.*

<sup>67</sup> *Ibid.*, p.315.

<sup>68</sup> *Ibid.*, p.318.

<sup>69</sup> *Ibid.*, p.315.

<sup>70</sup> *Ibid.*, p.317.

<sup>71</sup> 岡真理『思考のフロンティア—記憶／物語』岩波書店、2000年、85頁。

ことはしない。ただノスタルジーが映し出すものを読み取ろうと努めるだけである。それは、ロシアの地での生にあくまで実体的に執着したソルジェニーツィンのような作家や芸術家とは趣をまったく異にする。帰郷するという誘惑に屈すまいと抗うなかで、憧れはいつしか「反省的ノスタルジー」として、意識の中でのみ帰郷を繰り返すのである。一方では、彼らは三人とも、自分がロシア文化に深くつながっていることを強烈に意識している。ナボコフの作中での帰郷行為もつねにロシアにかかわっていた。プロツキーの詩作はほとんどがロシア語で行われていた。カバコフは、自分のことをソヴィエトのアーティストと呼んでくれるようにと要請する。

ノスタルジーは、進歩を追求する直線的な時間の中には生きていない。それは子ども時代に似ている。ゆっくりと過ぎ行く時間に合わせる中で、自分が本当は何にあらがわれているのかという反問を続けるのである。ノスタルジーは、押しつけがましい声で語られることはない。むしろ亡命芸術家たちの作中に漂うのは、欠損の感覚や不協和音である。その苦痛の中に、断裂や妥協や困惑といった感覚が浮かび上がってくる。民族や共同体に収斂されることに対する戸惑いや動揺やどこか危うい感覚を飼いならせない。三人の芸術家たちは追放の生を生きる中で、魂を引き裂かれたまま、自己の喪失した部分を何をもってしても完全には充填しきれなかったのであり、そのことが繰り返しノスタルジーとして立ちあがるのである。

### ノスタルジー研究の有効性

過去の暴力的な出来事を風化させないためには、現在にまで継続するその暴力の痕跡を凝視し、またそこに囚われて生きている人びとの記憶を掘り起こすしかない。それが現在の状況を認識する行為であり、また、忘却によって暴力的な出来事が反復されることを避けるための倫理的な要請でもある。当事者や当事者の属する共同体にとどまらず、広く世界全体で、そのような記憶が分有される必要がある<sup>72</sup>。ノスタルジーは、センチメンタリズムやホームシックを連想させる、きわめてエモーショナルな心理的傾向として通常は理解され

ている。しかし、ノスタルジーは本質的には集合的記憶の一形態として、この分有するという営為において有効な手段となりうるものである。

ノスタルジーの最大の特徴は、それがもつある種の「自立性」にあるということもできる。ノスタルジーは、作品の中、証言の中、都市の様態の中などに見いだすことができるが、それが描き出す記憶の情景は、実はそうした対象や出来事それ自体ではない。むしろ、見えないものの中にこそ、不在のなかにこそ、出来事の痕跡が追い求められている。ノスタルジーは、マトリョーシカのように、層をなす記憶の奥深いところに潜むものを、浮かび上がらせる。あるいは本人が理性的、作為的には取り出すことのできないような封印されている記憶のかけらが、ノスタルジーという媒介物を通して明るみに出てくるといいうほうが適切であろうか。そのような記憶は、歴史が構築されるときと同じ力学に晒され、いくらでも加工変形が可能な素材でもある。しかし、同時にまたそれは不随意なもの、非意志的なものでもある。ノスタルジーもまた、この不随意性、非意志性は同じである。それは無意識のうちに自己から離れて外部に現象する。したがって、内部の意識によって変成されることがあっても、外部要因によってたやすく加工されるというわけではない。いわば批判的なかたくなさともいえるべきものとして、ある種の自立性をもっているのである。

第二に、ノスタルジーでは、頻繁に過去の記憶とユートピア像が二重写しになることが起こる。人がノスタルジーを抱くのは、実際にそうであった過去についてではなく、そうあってほしかった過去、あるいは、ありえたかもしれない過去についてである。そのことは、とりまなおさず、ノスタルジーの立ち現れ自体が、現在が過去に投影されたユートピア感覚を満たしていない疎外状況であるということを認識させる。権力者が踏みつけにしてきた人びとのユートピアの形が浮かび上がるとき、ときにはそれは、現状変革の起点となりうるのである。ノスタルジーのパースペクティブは過去から未来にわたるが、それは、後ろを向いていると見えながら、未来を「意志」<sup>73</sup>するもの

<sup>72</sup> 同前。

<sup>73</sup> ハンナ・アーレントは、『人間の条件』で現象世界での「活動的生活」について論じたが、未完の遺稿『精神の

でもありうる。それこそが「反省的ノスタルジー」とボイムが規定したカテゴリーの特性であり可能性である。「復旧的ノスタルジー」は、実際の過去<sup>74</sup>と、願望を投影した自分のユートピア像との境界を曖昧にし、たとえ自己欺瞞であっても心地よく自分を維持できる虚像の過去のなかに住み続ける。これに対して、「反省的ノスタルジー」は、二つの異なるイメージをひとつの枠に押し込もうとすることの虚構性を暴き出す力がある。作られた歴史を解体するのも、未来との懸け橋となるのも、「反省的ノスタルジー」だけである。だからこそ、ボイムにとって、ノスタルジーの分析においては二つのカテゴリーが峻別される必要があったのだ。

ボイムによれば、ノスタルジーはディテールとキッチンにこだわり、それらと親和性をもつ。アメリカに帰化したロシア系の亡命者の家を訪れると、故郷では一顧だにされていなかったマトリョーシカやホフロマ塗<sup>75</sup>が飾られ、ロシアの名所を写した何年も前のカレンダーがかけられたままであることが多いという。キッチンとは、大衆社会に投げ込まれた現代人が物や状況から疎外されていることについて、ほどほどのところでその疎外に折り合いをつけ、文化や文明を日常に持ち込もうとしたときに生まれるものである。だから、それはひそかな悪徳であるとも言える<sup>76</sup>。しかし、モルによれば、「悪徳というものをまったく持たずに生きていける人間がどこにいるだろうか、キッチンの持つ圧倒的なエネルギーとその普遍性こそが、そこに起因している」<sup>77</sup>。人の生はディテールから成り立っているが、通常はこのような細部

には重きを置かれず見過ごされ、忘却されてしまう。歴史が作られるそばから、ディテールはこぼれ落ちていく。しかし、「反省的ノスタルジー」が発動されるたびに、無意識下の細部が記憶の底から取り出される。それはそこに重大な何かを想起させようとする力が作用しているからである。ノスタルジーが捉えるキッチンやディテール、つまり俗っぽいものや取るに足らないものが、実際の風景と心象風景との間の裂け目に現れて、それらの相互関係とひずみを自覚させるのである。

さらにノスタルジーは、個人的な記憶の変異体、ヴァリエーションであり、かつ集合的記憶でもある。それにしても、ボイムの著作の第三部の実践のように、数人のノスタルジーを検証することで、はたして集合的記憶を構築したり批判したりすることはできるのだろうか。この問いに対しては、ベンヤミンの思索が有効な解答を与えてくれる。「すなわち、ひとつの仕事(作品)の中にひとつの生のなした全仕事(全作品)が、この全仕事(全作品)の中にその時代が、その時代の中に歴史経過の全体が、保存されており、かつ止揚されているのである」<sup>78</sup>。選り出された人間の中には、そしてその作品の中には、これまでの全歴史の過程が保存されている。また集合的記憶論の起源であるアルヴァックス理論では、「人間の精神は記憶の中においても社会から遠ざかっているのではない。だから個人の記憶も、集合的記憶の枠によって与えられていることがあきらかになってくる」<sup>79</sup>とされている。

だが、他方で、集合的記憶が立ちあがったときに始められる思考は、徹底的に個人的なものにもなる。たとえば、小森陽一は、ある文脈で在日作家の経験を取り上げてつぎのように論じている。在日朝鮮人としての立場から行われる講演を聞くと、聴衆の日本人は、「私たち日本人は本当にだめなんです。島国根性で、何も知らなかったんです」と言ってそそくさと既成の制度の中へ帰っていく。小森は、「なんにも知らなかった」という現実は、「私たち日本人」ではなく、ほかでもなく彼や彼女自身が、きわめて個人的に引き受けるべきこと

生活』ではそれと並立する「観想的生活」にわけいている。そこでは、一旦現象世界からひきこもってなされる思考、意志、判断という精神の営みが、それぞれ自律的に省察されている。そこで、思索が実践に架橋可能であるか、という問いが定立されていることが、ボイムのこの議論とかかわりがある。思考は事象の意味を知ろうとするが、その思考を受けて、意志は現象世界に働きかけようとする行為の始まりになる。本稿においての「意志」は、現象世界の政治的枠組みの中で現在を変革する空間を切り開こうとする、アーレント的な自由意志と重なってくる。

<sup>74</sup> 過去といっても、確固たる一つの何かとして認識し、表象することは不可能なのである。

<sup>75</sup> ロシアの伝統工芸品。

<sup>76</sup> アブラム・A・モル『キッチンの心理学』法政大学出版局、1986年による。

<sup>77</sup> 同前、25頁。

<sup>78</sup> ヴァルター・ベンヤミン『ベンヤミン・コレクション 歴史の概念について』ちくま学芸文庫、1995年、662頁。

<sup>79</sup> M.アルヴァックス『集合的記憶』行路社、1989年、259頁。

ではなかったのか」<sup>80</sup>と問いかける。分有するということは、当事者と個として向き合い、表象不可能な部分もすべて含めた経験の全体を感じ取り、それについて熟考するということであろう。

ノスタルジー分析が亡命者たちの疎外状況の解明に有効であることは見てきたとおりである。ノスタルジーが反省的なものであるかぎり、そこから精神の自己疎外状況の認識に到達することができし、そうせざるをえない。ナボコフが作品のなかのスパイを帰郷させ、プロツキーが徹底した個人主義を対置し、カバコフが自分のインスタレーションの中に来場者とともに住むという行為は、「反省的ノスタルジー」を通して自己との対話を試みていることなのである。自己実現を追求して高次の地平に至ろうとする弁証法である。自己の中のもう一人が帰郷を果たし、全き自己自身となろうとする弁証法的総合である。「悲劇の持つ本質的な豊饒さ」<sup>81</sup>と表現されるものがここにはある。彼らが現実世界での帰郷について選択的否定という態度を貫くことは、民族や国民国家に帰属する概念を無効にしかねない。

しかし、全体主義にすっぱり覆われた彼らの現実の生では、悲劇の豊饒さといったものはさしあたり何の意味もなさない。それは、愛する者との離反と疎外、生の断裂を通してしか、究極の自己実現は不可能であるというアイロニーである。魂を奪われたままであるのに、実際のロシアには帰郷することができない。現実には帰郷するということは、かつて今も全体主義の暴力性を内在させたままのロシアと和解するということであり、大衆の中の一人としてアトム化されることを受け入れ、自己を滅却して生きるということの意味するからだ。彼らがこの破滅を回避して本当の帰郷ができるのは、「歴史を通じて意識が展開し」<sup>82</sup>、すなわちベンヤミンの言葉を借りれば、一瞬の閃光を招きよせ、ショックで思考が停止した時、出来事の全体が照らし出され、疎外の状態を脱してメシア的な約束が果たされる、稀な瞬間においてのみである。

### ボイムとカルチュラル・スタディーズ

冒頭で確認したように、本書は、全体がひとつのまとまったカルチュラル・スタディーズの営みである。本書で取り上げられる個々のノスタルジー現象は、ランダムに選択されたものではない。ノスタルジーは、革命という歴史の断絶後に現れやすいものであるのだが、その中からボイムの哲学的な嗅覚をもって、表象の隠れた意味が読解されている。個々の事例を解説するそのつど、古典古代から現代にいたる哲学概念が参照されるのである。しかし、このときの哲学概念は、分析の補助線でもなければパラメータでもない。ノスタルジーを検証して集合的記憶をとらえようとする営みは、経験としての過去の出来事が持つ意味を考え抜こうとする、思考の過程そのものなのである。それは、全体主義の暴力の基底にある国民国家の暴力の彼岸に出ていくことは可能か、あるいは「個人と国民国家といったものの間を調停する力学は可能か」<sup>83</sup>というポストモダン的な問いに向き合うことでもある。

カルチュラル・スタディーズが、社会変革に踏み込むよりは、その直前で立ち止まり、「知る」作業のなかにとどまるのは、その究極の目標を、思考する人間、精神の上で自立し批判的に世界や政治を見ることのできる市民を一人でも多く輩出することにおいているからだと考えられる。ボイムも、結論めいたものは提示しようとはしていない。いわば、かけらを並べて見せるだけで、ひたすら読者の独自の思考の立ち上がりを促していると思われるのである。

(いしまる あつこ・東京外国語大学大学院博士前期課程)

<sup>80</sup> 小森陽一『〈ゆらぎ〉の日本文学』NHK ブックス、1998年、311頁。

<sup>81</sup> ジョージ・スタイナー『アンチゴネーの変貌』みすず書房、1989年、30頁。

<sup>82</sup> 同前、18頁。

<sup>83</sup> 同前、32頁。